

# 社報 御霊本宮

第92号

発行者

御霊神社本宮  
宮司 藤井利夫  
五條市霊安寺町  
0747-23-0178

発行日

令和4年  
1月1日

みずのえとら どし

## 壬寅年

「壬」は中国の古文書によると、「人の懐妊の形に象る」「妊なり。陰陽交ざわりて物懐妊するなり」「陽氣が萬物を下に壬養するを言うなり」とあり、「壬」は「妊」に通ずるとされています。

「寅」の字は、屋内で手を取り固く約束する意とも、矢柄の曲直を両手で正す意ともされ、「易氣動き、黄泉を去りて上出せんと欲するも、会尚ほ強し。深くして達せず」とも言われ、「慎む」意もあるようです。

「壬」も「寅」も陰が陽に転じる時期を示している文字と解釈されていたようです。



獸の虎は、四神の白虎をはじめ靈獸

であることが多くあります。

日本には野生の虎は生息せず、大陸や半島からの情報を通して、その姿を思い描いてきました。

日本書紀には、高麗に留学した鞍作得志は虎を友として種々の靈術を学んだものの、彼の帰国の意思を知った高麗に毒殺されたと記しています。虎が靈獸とされたことを示す話です。

虎はまた、多くの画師にも描かれて城や寺社の障壁を飾ったり、数多くの諺に用いられたりしています。

風を呼び、一日千里を行くという虎を、日本人は実物を見る以上に身近に感じていたようです。

野生の虎がいない日本では、古来の信仰に虎が関わることは多くありません。わずかに毘沙門天の神使などとして登場します。

信貴山の朝護孫子寺や京都の鞍馬寺、埼玉の多聞院など、毘沙門天を祀る寺院では虎との縁が深くなっています。

薬の祖神である少彦名命を祀る大

阪の少彦名神社では、張子の虎がお守りとして親しまれています。

文政五年（一八二二）のコレラの流行の際、薬種仲間が、丸薬「虎頭殺鬼雄黄円」を作り、「神虎」（張子の虎）とともに神前で祈願した後授与したことに由来するということです。

「壬寅」は、「陽氣を孕み、春の胎動を助く」という意味をもち、冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれることを表しています。

新型コロナウイルスが猛威をふるい、私達の生活が脅かされました。壬寅の意味にあてはめてみますと、この苦難は厳しい冬であり、これからはコロナに打ち勝ち、生命力が溢れるときに訪れると解釈できます。

万葉の花たち

## ほよ(ヤドリギ)

あしひきの 山の木末の 寄生取りて  
挿頭しつらくは 千年壽くとそ

大伴家持（十八—四一三六）

「山の梢のホ

ヨを取って髪に飾るのは、千年

の命をお祝いし

てのことですよ」



この歌は、大伴家持が越中の国守をしていた頃の天平勝宝二年（七五〇）正月二日に詠んだ祝い歌です。

「ほよ」は落葉高木に寄生する「寄生木」のことです。落葉樹が葉を落としても青々と葉を繁らせているヤドリギは、生命力の強い木として神聖視されました。一年の初めにあたり、特に生命力の強い寄生木を挿頭にしてお供えを願いました。

宇智郡 狛犬めぐり  
今井 宇智神社

耳の下  
から顎に  
かけての  
巻毛が大  
きく、そ  
こから下  
に流れる  
毛並みも  
太く大き  
く、また  
走り毛も  
大きく彫  
られています。



此形は阿形に  
比べてふつ  
くらとして  
います。

この狛犬は安政六年（一八五九）に奉納されています。前年に始まった安政の大獄と呼ばれる弾圧のあったときで、庶民は不安な思いをもったことでしょう。この狛犬に世の中の安定の願いをも込めて奉納されたことでしょう。

### 商売繁盛で笹持ってこい 恵美須神社で初戎祭

今日九日  
から五條町  
の恵美須神  
社で「初戎  
祭」が行わ  
れます。



九日（日）九時 宵戎祭

十日（月）九時 本戎祭

十一日（火）九時～十一時頃 吉兆頒布

吉兆購入者には福引（ガラガラ抽選）を行っていただき、福を授かっていただきます。笹や福鈴の無料授与もあります。

ご家族お揃いでお参りいただき、商売繁盛をはじめ、家内安全、無病息災など御祈願ください。

戎は、左脇に鯛を右手に釣竿をもっています。その姿は、もともと漁業の守り神であり、海からの幸をもたらす神を象徴しています。

海辺で物資の集まりやすい土地では、海の種々の産物と里の産物、野の産物とが物物交換される「市」が開かれるようになり、その市の守り神として戎が祀られるようになりました。

時代が経るに従い、市場の隆盛は商売を発展させ、いつしか福徳を授ける神、商業の繁栄を祈念する神としても厚く信仰されるようになりました。



八百万の神々

### 大年神

素戔嗚尊と神太市比売との間に生まれた神です。「とし」はもともと穀物などの実り、収穫を意味しています。その収穫に一年を要するところから「年」と表記するようになりました。よってこの神名には、豊かな実りをもたらす神という意味があります。

「大年（大晦日）の客」と呼ばれる昔話が日本各地にあります。「大晦日の晩に貧しい身なりの人がやってきた。家人は土間にむしろを敷いて寝かせた。翌日、その人の姿はななく、たくさんのお金が残されていた。年神様がきたのだと思い、大年に年神さまを祀るようになった。」

ここに登場するのは去来神（来訪神）であり福の神のような神霊です。そこに農耕神（穀霊）の性格が加えられたのが大年神であると考えられています。

# 五條十八景を訪ねて

## 第十三景 「御霊古祠」

一宮の松柏 肅陰の森  
 萬古の淑靈 民の欽ふところ  
 瑶琴何ぞ須ひん 清怨を写すを  
 秋風 名月 帝郷の心

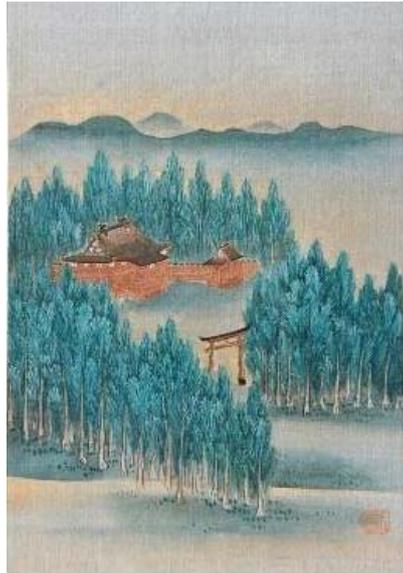
松や柏の繁った森の木陰に静かに鎮座します神の社がある。

昔からおまつりされている神の御霊はこの付近の人々から敬慕されている。

琴の音色を聞くまでもなく神前に額づくくと、清らかな気持ちが湧いてくる。

秋風に吹かれ皎々と照る月のもとで、別天地に遊ぶような気持ちになる。

昔は絵に描かれているよう



に、うつそうとした森に囲まれていたと考えられています。

江戸時代の頃の絵図には、鳥居の前を南北に通る道が描かれています。それ以前はその道は無く、鳥居から東方に延びる道が一本だけあったという事です。

十津川街道を行く人々は、その参道を通って御霊神社で旅の安全を願いました。そして森の中を歩いて現在の下田橋の辺りで渡し船に乗り、対岸に渡って十津川方面に向かったと伝わります。

戦前に境内が整備され、景観が大きく変わりましたが、「民の欽ふところ」「帝郷の心」は変わらないようです。

## 神虎笹を

### 授与します

当社では、新年より御参拝いただいた方に「神虎笹」(一体五〇〇円)を授与します。この一年の無病息災、家内安全、開運厄除のお守りとしてお受けください。

このほかにも新年の授与品を用意しています。



Instagram @goryohongu  
 Twitter @goryohongu




#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ  
<http://goryojinja.or.jp>



## 神宮大麻

年末に神宮大麻(伊勢神宮の御神札)が氏神の御神符と一緒に配布されます。

平安時代、神宮と人々の間を取り持つ御師と呼ばれる人たちが、神宮にお参りできない遠くの人々に「御祓大麻」を届けました。明治時代に御師制度が廃止され、神宮司庁が「神宮大麻」を奉製して全国の家庭に頒布されるようになり、戦後は神社本庁が神宮司庁の委託を受け、全国の神社を通じて頒布しています。

近年、神棚のない家庭が増えてきました。このような状況を考えて、神宮から神棚用のお社を無料配布されています。

当社でも社頭にて無料配布していますので、神宮大麻をはじめ氏神の御神符を祀られる方は、お持ち帰りいただけます。

日本書紀にみる

# 十二代景行天皇(九)

冬十月二日、日本武尊やまとたけるのみことが出發しました。七日、寄り道をして、伊勢神宮を参拝しました。

倭媛命やまとひめのみことにお別れの言葉を述べ、「今、天皇の命を承つて東国に行き、諸々の反乱者を討つことになりました。それで、ご挨拶に参りました」と言いました。

倭媛命は草薙剣くさなぎのつるぎを取つて、日本武尊に授けて言いました。「よく気をつけ、決して油断をしないように」と。

この年、日本武尊は初めて駿河に行きました。その賊が従つたように見せ、欺いて、「この野には大鹿が多く、その吐く息は朝霧のようで、足は若木のようなです。お出でになつて狩りをなさいませ」と言いました。

日本武尊はその言葉を信じて、野に入り狩り、をしました。賊は、皇子を殺そうという気があつてその野に火を

放ちました。

皇子は欺かれたと気づき、火打石を取り出して火をつけ、迎え火をつくつて逃れることができました。

また一説には、皇子の差しておられる天叢雲剣あめのむすぶりのつるぎが、自ら抜けだして皇子の傍の草をなぎ払い、これによつて難を逃れたといひます。それでその剣を名づけて草薙くさなぎというたされます。

皇子は、「危なく欺かれるところであつた」と言いました。

そして、ことごとくその賊共を焼き滅しました。だからそこを名づけて焼津やいづ(静岡県焼津)といひます。

さらに相模に出て、上総に渡ろうとしました。海を望んで大言壮語して、「こんな小さい海、飛び上つても渡ることができよう」と言いました。ところが海中に至つて暴風が起り、御船は漂流して進みませんでした。

そのとき皇子につき従つてきた妾めかけがあり、名は弟橘媛おとこのはなひめといひます。穂積ほづみ氏忍山宿禰おしやまのすくねの娘です。

皇子が言うには、「今、風が起り、波が荒れて御船は沈みそうです。これはきつと海神の仕業です。賤しい私めが皇子の身代りに、海に入りましょう」と言い終わると、すぐ波を押しわけ、

から移つて陸奥国に入りました。そのとき、大きな鏡を船に掲げて、海路から葦浦あしうらに回りました。そして玉浦たまうらを横切つて蝦夷えみしの支配地に入りました。

蝦夷の首領である島津神しまづかみ、国津神くにつかみたちが、竹水門たけのみなとにたむろして、これを防ごうとしました。しかし、遙かに王船を見て、その威勢に恐れ、心中、これは勝てそうにないと思い、すべての弓矢を捨てました。仰ぎ拜んで、「君の顔を拝すると、人に優れていらつしやいます。神様でしょうか。お名前を承りたい」と言いました。

皇子は答えて言いました。「我は現人神あらひとがみ(天皇)の皇子である」

海に入つてしまいました。暴風はすぐに止まりました。船は無事岸につきました。

当時の人は、その海を名づけて馳水はりのみずと言いました。

日本武尊は、上総

(次号につづく)

